

西国33所観音霊場 琵琶湖周辺 旅

4月3日

福岡空港 7:50 ANA1702便 ⇒ 8:50 関西国際空港

関西国際空港 ⇒ 京都駅 高速バス

関西空港第1ターミナル(8番のりば)09:30 ⇒ 10:58京都駅八条口

京都駅八条口まで第1ターミナルから約88分 2,550円

往復(有効期間) 4,180円(14日間) (現地支払い)

京都駅

J R東海道山陽本線新快速 野洲行 2番ホーム 運賃200円

11:15発 ⇒ 9分 10.0km ⇒ 11:24着 大津駅 1・2番ホーム

12:00

観光ジャンボタクシー 予約 (現地支払い)

大津駅 ⇒ 三井寺 ⇒ 岩間山正法寺 ⇒ 石山寺 ⇒ 瀬田唐橋 ⇒ 大津駅

滋賀MK観光タクシー TEL:077-531-2001

ジャンボ料金 (9人乗り)

5時間 30,960円 延長30分毎 2,580円

大津駅 18:11 ⇒ 近江八幡駅 18:35 24分 500円

(18:26発 18:41発 途中乗換あり)

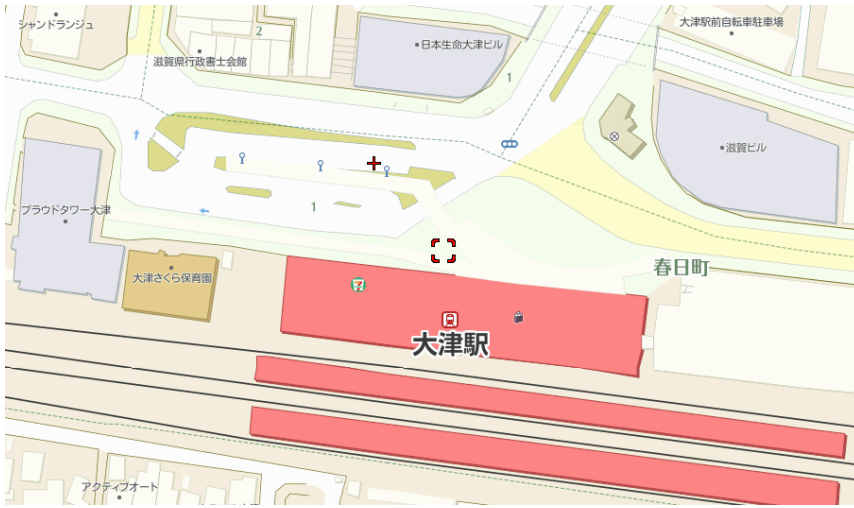
宿 近江八幡駅徒歩2分

ホテル ニューオウミ (ホテルニューオータニアソシエイト)

ツイン3部屋 (1部屋のみ3人) 朝食のみ

(現地支払い)

夕食は外で



JR東海道本線 ⇒ 東京方面



三井寺 西国三十三所観音霊場第十四番札所

天台宗（てんだいじもんしゅう）の総本山である三井寺（みいでら）は正式名称を長等山園城寺（ながらさんおんじょうじ）といいます。

湖国近江の名勝、近江八景の一つ「三井の晩鐘」でも知られています。

667年に天智天皇により飛鳥から近江に都が移され、近江大津京が開かれました。

672年、前年の天智天皇の永眠後、大友皇子（天智天皇の子：弘文天皇）と

大海人皇子（天智天皇の弟：天武天皇）が皇位継承をめぐって争い、壬申の乱が勃発。

壬申の乱に敗れた大友皇子の皇子の大友与多王は父の霊を弔うために「田園城邑（じょうゆう）」を寄進して寺を創建し、天武天皇から「園城」という勅額を賜ったことが園城寺の始まりとされています。

勝利をおさめた大海人皇子は再び飛鳥に遷都し、近江大津京はわずか五年で廃都となりました。

三井寺と呼ばれるようになったのは、天智・天武・持統天皇の三帝の誕生の際に御産湯に用いられたという霊泉があり「御井の寺」と呼ばれていたものを後に智証大師円珍が当時の厳義・三部灌頂の法儀に用いたことに由来します。

現在、金堂西側にある「閼伽井屋」から湧き出ている清水が御井そのものとされています。

貞観年間(859～877)になって、智証大師円珍（ちしょうだいしえんちん）和尚が、園城寺を天台別院として中興されてからは、東大寺・興福寺・延暦寺と共に「本朝四箇大寺（しかたいじ）」の一つに数えられ、南都北嶺の一翼を担ってきました。

円珍の死後、円珍門流と慈覚大師円仁門流の対立が激化し、正暦四年（993）、円珍門下は比叡山を下り一斉に三井寺に入ります。この時から延暦寺を山門、三井寺を寺門と称し天台宗は二分されました。

その後、両派の対立や源平の争乱、南北朝の争乱等による焼き討ちなど幾多の法難に遭遇しましたが、智証大師への信仰に支えられた人々によって支えられ、その教法は今日に伝えられています。

三井寺の本堂、金堂には、本尊として弥勒菩薩（みろくぼさつ）が祀られています。

「寺門伝記補録」によると、身丈三寸二分の弥勒菩薩が祀られていることがわかりますが、絶対の秘仏となっているために見る事ができません。

この弥勒菩薩は天智天皇の御念持仏と伝えられています。

さらに、推古天皇、聖武天皇、陽成天皇、藤原鎌足、藤原道長、行基菩薩が奉納した六軀もの弥勒菩薩がお祀りされています。その他にも智証大師ゆかりの仏像や宝物が秘仏として大切に安置されています。

入山料 大人 600円（個人） 駐車料金 普通車 500円
拝観所用時間 50～60分

三井寺の桜について

近江八景「三井の晩鐘」で名高い三井寺（園城寺）の広大な境内には、約1,000本とも言われる桜が植えられており、4月には境内がピンク一色に染まります。春のライトアップも行われ、夜桜コンサートが開催されます。

観音堂

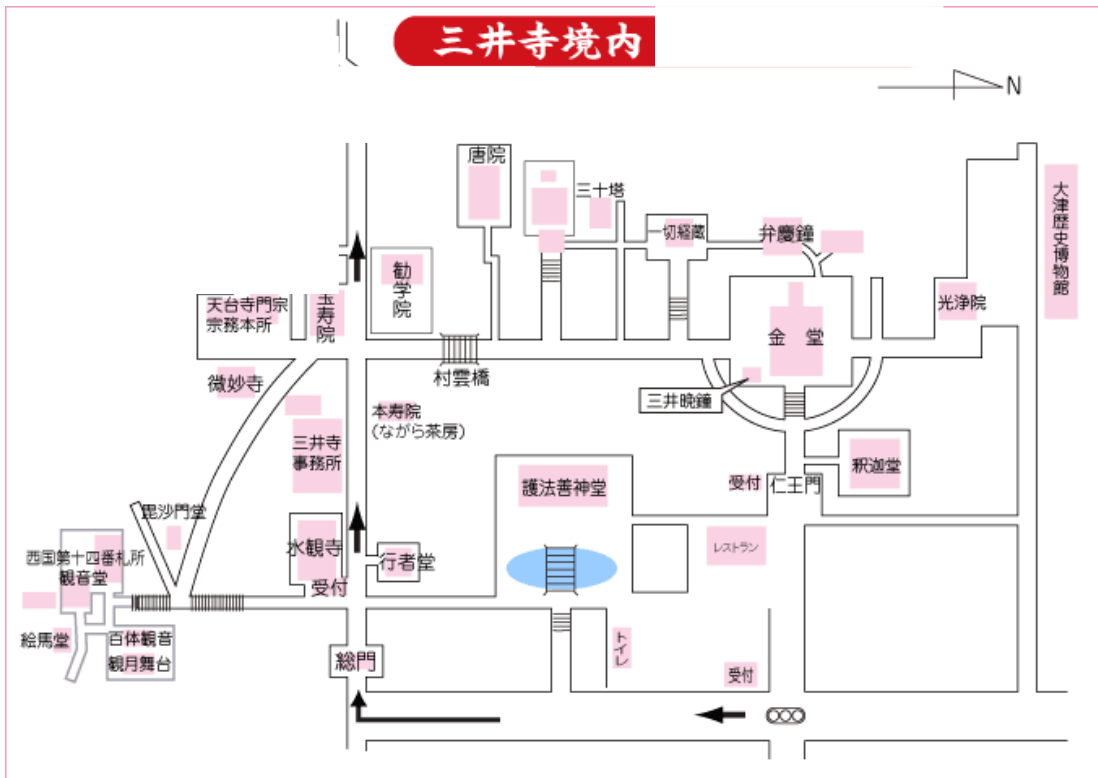


五重塔



三門





石山寺 西国三十三所観音霊場第十三番札所



西国三十三所観音霊場第十三番札所として、また近江八景「石山の秋月」としても名高い寺院で、全国でも類を見ない巨大な硅灰石（天然記念物）の上に建てられている。

奈良時代、聖武天皇の勅願により良弁僧正が開基。東寺真言宗大本山。

平安時代には、石山詣が盛んで観音堂に参籠し、一夜を過ごすことが流行りました。

特に清少納言や和泉式部などが石山寺のことをその作品に描いており、女流文学の開花の舞台となりました。

中でも源氏物語の作者として有名な紫式部は、この石山寺に参籠し、十五夜の名月を眺めたとき源氏物語の構想を思い起こしたとされています。今でも式部が参籠した源氏の間が残っています。

後世かの有名な俳聖松尾芭蕉や島崎藤村もこの寺を訪れています。

境内には、国宝の本堂や多宝塔をはじめとする文化財や、咲き誇る桜・ツツジ・菖蒲など花のお寺としても有名で、見どころの尽きない寺である。



本堂で引き返すコースは約30分、
月見亭折り返すコースは約60分、
ぐるっと1周コースは約90分です。



岩間寺（岩間山正法寺） いわまでら（いわまさんしょうほうじ）

西国三十三カ所霊場の第12番札所

ご本尊は、御丈十五センチの千手観音で、「雷除け観音」「汗かき観音」「厄除け観音」「**ぼけ封じ観音**」と呼ばれている。

京都・滋賀の境にある標高443mの岩間（いわま）山頂付近にあります。

奈良時代に、泰澄（たいちょう）がカツラの木で千手観音を刻み、本尊にしたのが始まりと伝えられています。室町時代に西国三十三カ所霊場の第12番札所となって以来、多くの巡礼者が参詣するようになりました。本尊の観音像は、人々を苦しみから救うために、毎晩136の地獄を巡るので全身から汗を出すといわれ、「汗かき観音」として、また「ぼけふうじ観音」としても広く慕われています。

木立ちに囲まれ、ホトトギスの声が聞こえる境内には、本堂や大師堂などの建物が並び、本堂横にはしっとりとした独特の趣がある古池があります。

この池は、「芭蕉の池」といわれ松尾芭蕉（1644-94）が「古池や蛙飛び込む水の音」という名句を詠んだといわれています。

岩間山正法寺縁起

滋賀県大津市と京都府宇治市の境にある標高443mの岩間山中腹に位置し、岩間山正法寺と称する。

西国三十三所第十二番、ぼけ封じ近畿十楽 観音霊場第四番札所、びわ湖百八霊場湖西二十七古刹第二番。

養老六年(722年)、加賀白山を開いた泰澄大師が元正天皇の33歳の大病の病を法力により治した褒美として建立したことに始まる元正天皇の勅願寺院である。

往昔は、後白河（ごしらかわ）・後宇多（ごうだ）・正親町（おおぎまち）天皇等歴代天皇の尊崇厚く熊野、吉野に並び、日本三大霊場の一として隆盛していた。

養老六年元正天皇の病氣平癒祈願を成満した泰澄は、同年、加賀白山を開く途上、霊地を求め岩間山を訪れた折、桂の大樹より千手陀羅尼を感得し、その桂の木で等身の千手観音像を刻み、元正天皇の御念持仏をその胎内に納め祀りご本尊とした。

ご本尊は、毎夜日没とともに厨子を抜け出て百三十六地獄を駆け巡り、苦しむひとびとを悉く救済し、日の出頃、岩間山へ戻られた時には汗びっしょりになられているので、そのお姿から「汗かき観音」と呼ばれている。

また、泰澄大師が当地に伽藍建立の際、たびたび落ちる雷に困り果て、ご自分の法力で雷を封じ込め、落ちる訳を尋ねられたところ、雷は大師の弟子になりたいのだと申し出た。大師は快く雷を弟子にし、その代わりに岩間寺に参詣の善男善女には、雷の災いを及ぼさないことを約束させた。

これが「雷除け観音」とよばれる由縁で、毎年四月十七日には、雷除け法要（雷神祭）が奉修され、多くの参詣者で賑わう。

この雷は、水の乏しい寺のために、自らの爪で井戸を掘ったという。この「雷神爪掘湧泉」と呼ばれる霊泉には元正天皇御製の、「沸きいづる 岩間の水はいつまでも つきせぬ法のみ仏の影」という歌が伝えられている。

また、『観音霊験記』によると、江戸時代の俳聖松尾芭蕉は、岩間寺に参籠してご本尊の霊験を得、その俳風を確立したと言われており、本堂横手には芭蕉が「古池や蛙とびこむ水のおと」を詠んだと伝えられている「芭蕉の池」が残っている。

西国第11番の醍醐寺とは本末関係にあり、鎌倉時代に編纂された『醍醐雜事記』には醍醐寺末寺の筆頭「石間寺」として挙げられているなど、正法寺は法界寺とともに醍醐寺から僧侶が直接法会法式を行う別院として、醍醐寺の庇護を受けていた。このことは明治の寺院調査の記録にも記載されているが、正法寺が醍醐寺より禄を受け運営の資としていたことから明瞭である。さらに現在の本堂は醍醐寺理性院堯助僧正が、正親町天皇の御願を受け、天正5年（1577）に建立されたもので、以降、理性院が管理に大きく携わっていたことが『正親町天皇宸翰女房奉書（理性院宛）』、『妙法院門跡日記』などより知られている。

また、住職もその多くが近世に至るまで醍醐寺内より選ばれて就任し、護持に尽力してこられている。

参拝時間 ゆっくり廻って50分

拝観料：500円



松尾芭蕉が、あの有名な『古池や蛙飛びこむ水の音』を詠んだと伝わる池

ぼけ封じ観音第4番札所



白姫龍神に、女性が手を合わせると身も心も美しくなると伝わっている



瀬田の唐橋 せたのからはし

近江八景「瀬田の夕照」(せたのせきしょう)の主題である「瀬田唐橋」は、別名「瀬田橋」や「長橋」とも呼ばれ、東海道・東山道(中山道)方面から京都へ向かうには、琵琶湖を渡る、もしくは南北いずれかに迂回しないかぎり、琵琶湖から流れ出る瀬田川を渡る必要があり、「唐橋を制するものは天下を制する」と言われ、日本書紀にも登場する、古来より京都ののど元を握る交通・軍事の要衝として重視され、瀬田橋が戦の歴史舞台になって千八百年になりますが、特に有名なものは、古くは、大津京が幻の都となった大友皇子と大海人皇子(おおあまのおうじ)の『壬申(じんしん)の乱』をはじめ、『寿永の乱』、『承久の乱』、『建武の乱』など幾多の戦乱の舞台ともなりました。

本格的には近江大津宮遷都の時に架橋されたと考えられるが、当時は現在の位置より65m南の龍王社・雲住寺を東端としていた。

織田信長の瀬田橋の架け替えは、比叡山焼き討ちの4年後、天正三年(1575)に諸国の道路修理を命じ関税を免除するとともに、瀬田城主、山岡景隆と木村次郎左右衛門を奉行に任命し、近江の朽木などから木材を調達し、長さ百八十間(約350m)、幅四間(約7m)の一本橋をわずか3ヶ月という突貫工事で架け替えさせたといわれています。

現在の橋は昭和54年に架け替えられたが、緩やかな反りや旧橋の擬宝珠など往時の姿をとどめている。

「いそがばまわれ」の語源となったエピソードでも有名。

『急がば回れ』の語源の由来

「もののふの 矢橋の船は速けれど
急がば回れ 瀬田の長橋」と
室町時代の連歌師宗長が詠んだのが始まりです。

距離が半分と短く、早便としての琵琶湖を横断する船のルートがありましたが、早便としての船のルートは比叡山から吹きおろす突風で船が難破することがあり危険なルートでした。そのため、「瀬田の唐橋を渡るルートが安全で確実」という歌が歌われたわけです。



千利休と古田織部の逸話に出てくる瀬田唐橋の擬宝珠

コンクリート製になら以前の木造の橋の擬宝珠をそのまま付けたとのこと。

(古田織部の見た時代の物では無いが)